

李商隱詩に見える芙蓉について

——無題詩「八歲偷照鏡」を主として——

鈴 木 義 昭

△ 1 V

李商隱自編の詩集は宋版も早く散逸したらしく、今日我々の目にする形態になったのは、明代になってからだと言われる。^①ここに言う「無題詩」の稱も注釋家の判断でその數を増減させることがある。四部叢刊本『李義山詩集』、『全唐詩』所收

のそれが十六首であるのを基本として、朱鶴齡『李義山詩箋注』^②、吳喬『西崑發微』^③等何れも十六首を採る。ただ、馮浩

『玉谿生詩箋注』^④は「長眉畫了繡簾開」、「壽陽公主嫁時粧」を含め、「幽人不倦賞」を「失題」に改めた十七首である。

又、詩體別配列を施した屈復『玉谿生詩意』^⑤の如く、馮浩の二首に「戶外重陰點不開」、「待得郎來月已低」の二首を更に加え、「萬里風波一葉舟」を除く十九首を無題詩と認めるこ

とすらある。これは無題という題を持つ故の、時間、空間を限定できぬ詩自體の曖昧性に歸するであらう。

本稿では四部本、『全唐詩』本に倣い、以下の十六首を無題詩と認める。

「八歲偷照鏡」・「幽人不倦賞」・「照梁初有情」・「昨夜星辰昨夜風」・「聞道閨門萼綠華」・「萬里風波一葉舟」・「紫府仙人號寶燈」・「相見時難別亦難」・「來是空言去絕蹤」・「颯颯東風細雨來」^(四部本風を南に作る。今全唐詩本に従う。)・「含情春畹晚」・「何處哀箏隨急管」・「鳳尾香羅薄幾重」・「重幃深下莫愁堂」^(以上年次推定可能)

「近知名阿侯」・「白道繁廻入暮霞」^(一云陽城の。添句あり) (以上年次不詳)

各々に年代の開きを持ち、尚且つ内容を異にしながらも等しく無題という題を與えられた一連の詩に散見される民歌

的、樂府的表现を踏まえつつ、諸無題詩及びその他の詩中に見える「芙蓉」の語を眺めてゆきたい。

△2▽

無題詩中で最も早い時期に作られた「八歳偷照鏡」は次の如く詠まれる。

八歳偷照鏡 長眉已能畫 十歳去踏青 芙蓉作裙衩
十二學彈箏 銀甲不曾卸 十四藏六親 懸知猶未嫁

この詩は五言十句より成る古詩である。

元來このように年時を追いつつ、年代毎の事蹟を詠み込む形式は古樂府に淵源する。例えば、古樂府「陌上桑」(別名「豔歌」)にも見受けられるが、對象を女子の成長に限定するならば、馮浩の指摘の通り「爲焦仲卿妻作」(歌「玉臺新詠」卷一)の表現、

十三能織素 十四學裁衣 十五彈箏篴 十六誦詩書
十七爲君婦 心中常苦悲

を模したものと考えてよからう。

宋・郭茂倩『樂府詩集』に據れば、李商隱の樂府詩は以下の十種十三首が收められる。卷數及び分類を()中に示す。

「江南曲」(卷二六・相和歌辭一・相和曲上)・「玉昭君」(卷二九・相和歌辭四・吟歎曲)・「無愁果有愁曲」(卷七五・雜曲歌辭

一五)・「楊柳枝」二首(卷八一・近代曲辭三)・「李夫人歌」三首(卷八四・雜歌謠辭・歌辭三)・「燒香曲」(卷九五・新樂府辭六・樂府雜題六)・「房中曲」(同上)・「樓上曲」(卷九五・新樂府辭六)・「河內詩」その一・「湖中曲」(同上)

單に數量的な比較では、同時代の溫庭筠の五十四首(三百三十六首中)、中唐李賀の四十四首(二百四十三首中)とは比べくもない。偶々散逸せずに残った作品の多寡にもよろうが、同時代人杜牧のそれが僅かに二首であること、杜甫と李白の比較をする時歴倒的に後者が多いこと等から考えてみても、李商隱流の何らかの意圖―樂府詩に替るものを他の作品に求めようとする―があったと思われる。むしろ、敢えて樂府詩と稱さぬ所に、李商隱の意圖があったと考える方が自然のようである。李商隱詩に樂府詩の占める割合は三%を下るが、詩題の一部に樂府題的な題を持つもの、樂府題辭及びそれに似た題を持つもの、句中に樂府題辭を詠みこんでいるもの、樂府題辭に似た題を持つものという要素を加味するならば、その數はかなりなものとなる。

一 詩題の一部に樂府題的な題を持つもの。

「效江南曲」・「又效江南曲」・「射魚曲」・「昭肅皇帝挽歌辭」三首・「漢宮詞」・「齊宮詞」・「宮辭」・「曼倩辭」

二 樂府題辭及びそれに似た題を持つもの。

「離亭賦得折楊柳」二首(卷二二・橫水曲辭・漢橫吹曲・折楊柳)・「四皓」(卷五八・琴曲歌辭二・四皓歌)・「石城」(卷四七・西曲歌上・石城樂)・「蝶」・「蝶」二首(卷六一・雜曲歌辭一・蝶蝶行)・「少年」(卷六六・雜曲歌辭六・少年行等)・「楚宮」・「楚吟」(卷九五・新樂府辭六及び同樂府雜題六・楚宮行)・「櫻桃答」(卷八六・雜歌謠辭三・歌辭三・鄭櫻桃花)・「柳枝」五首(卷八一・近代曲辭三・楊柳枝)・「石榴」(卷一六・鼓吹曲辭・漢鏡歌一八・石榴)

三 句中に樂府題辭的な語を詠み込んでゐるもの。

「莫向樽前奏花落」(「宮辭」・卷二〇・橫吹曲辭四・漢橫吹曲・梅花落)「離居夢權歌」(「荷花」・卷二〇・相和歌辭一五・瑟調曲五・權歌行)「梁父吟成恨餘有」(「籌筆驛」・卷四一・相和歌辭一六・楚調曲上・梁父吟)「梁父哀吟鳩鴿舞」(「偶成轉韻七十二句贈四同舍」・同上)「心酸子夜歌」(「離思」・卷四五・清商曲辭一・吳聲歌曲・子夜歌)「邀爲子夜吟」(「蝶」・同上)「鸚能歌子夜」(「俳諧」・同上)「空聞子夜鬼悲歌」(「曲江」・同上)「子夜休歌團扇拵」(「和友人戲贈」二首・其の二・同上)「氣儘前溪舞」(「離思」・卷四五・清商曲辭二・吳聲歌曲・前溪歌)「前溪舞罷君廻顧」(「回中牡丹爲雨所敗」

李商隱詩に見える芙蓉について(鈴木)

二首・其の二・同上)「樂府聞桃葉」(「妓席」・卷四五・清商曲辭二・吳聲歌曲・桃葉歌)「豈宜重問後庭花」(「隋宮」・卷四七・清商曲辭四・吳聲歌曲四・玉樹後庭花)「莫以採菱唱」(「又效江南曲」・卷五〇・清商曲辭八・江南弄上中下・採菱曲・採菱歌等)「侍女吹笙弄鳳凰」(「留贈畏之」・卷五一・清商曲辭八・上雲樂・鳳凰曲)「不覺猶歌起夜來」(「正月崇讓宅」・卷七五・雜曲歌辭一五・起夜來)「樓上離人唱石州」(「代贈」二首・其の二・卷七九・近代曲辭一・石州)「唱盡陽關無限疊」(「飲席戲贈同舍」・卷八〇・近代曲辭・渭城曲)「斷腸聲裡唱陽關」(「贈歌妓」・同上)「惟有鄭櫻桃」(「櫻桃花」・卷八五・雜歌謠辭三・歌辭三・鄭櫻桃歌)

四 參考(樂府題辭に似たもの)

相和歌辭；「楚歌重疊怨蘭叢」(「潭州」)
吳聲歌辭；「歌翻玉樹塵」(「陳後宮」・玉樹後庭花)・「後庭玉樹承恩澤」(「柳」・同上)・「莫愁還自有愁時」(「莫愁」・莫愁樂)・「重幃深下莫愁堂」(「無題」・同上)・「儂今定莫愁」(「燈」・同上)・「不及盧家有莫愁」(「馬嵬」・同上)・「新佳人字莫愁」(「富平少侯」・同上)・「閨門日下吳歌遠」(「湖中曲」)・「賽歌太液翻黃鶴」(「寄令狐學士」・黃鶴歌)・「又彈明君怨」(「戲題樞言草閣二十二韻」・明君詞・明君曲

等)・「碧玉行收白玉堂」(蝶・碧玉歌)

舞曲歌辭；「衆山同日詠霓裳」(留贈畏之・霓裳辭)・

「朝元閣迥羽衣新」(華清宮・同上)・「煙幌自應憐白紵」

(汴上送李鄩之蘇州・白紵歌・白紵曲等)

雜歌謠辭；「蘇小小墳今在否」(同上・蘇小小歌)・「重

疊贈嬌饒」(碧瓦・董嬌饒)

以上の例の如くかなりの部分に樂府及び樂府題辭に關わる語が挿入される。後で比較を試みるが、李商隱には同時代の溫庭筠・中唐の李賀と異なり、六朝詩・樂府詩と聲高に語るのを潔しとしない部分があったように思われる。何故ならば、『樂府詩集』所收の彼の詩で、「清商曲辭」に分類される詩が皆無だからである。一見して樂府詩と思われるのを避けたと言えるかも知れない。だが、所謂民歌の寶庫と考えられているのは清商曲辭なのであって、イメージの源泉として、それを用いないことにはないはずである。にもかかわらず、これを何故用いなかったのであろうか。いや、實は用いないわけではなく、三、四に擧げた如く、句中には積極的に清商曲辭系をも取り入れている。しかも、それは吳聲歌曲、西曲歌が過半数を占めているのである。この意味では、六朝詩及び民歌・樂府の影響が色濃いと言うべきであらう。

△ 3 V

張采田はかねて「八歲偷照鏡」を詩人十六歳の時、太和元年(八二七)の作と推定した。⁽⁸⁾作詩の動機については、初めて科擧に應じようとした時の心境を詠んだものと考ええる立場もある(馮浩説)⁽⁹⁾し、少年が世の汚れに染んでゆき、人を愛することを知り初める頃の姿を詠んだものと主張する立場もある(張采田説)。政治的な不遇を詫っていた李商隱にとり、自分を推薦しようとする氣持は抑え難かつたであらうし、個人的な祕密を告白する機會も持たかつたに違いない。そうした公言できない部分を捉えるのに「芙蓉」の語は一つの鍵語となる。私はこれらに姉徐氏の死を悼んで作つたものとする見方を新たに提出しておきたい。

中國文學の傳統として、自らの才を矜り、不遇を世に訴える時、屈原『楚辭』が引かれる。その意味では馮浩が、この詩の「芙蓉」に「楚辭」「離騷」中の句、「製芰荷以爲衣兮、藥芙蓉以爲裳」及び揚雄「反離騷」中の「衿芰茄之綠衣、被芙蓉之朱裳」を注として取るのも首肯できよう。吳喬が「才而不遇之意」⁽¹²⁾と評したのも、恐らくは芙蓉の語自體の持つこ

もう一方で、男女の愛情を寓意する時にもこれは用いられる。元來、芙蓉は民歌・樂府系の詩の常套句であつて、蓮が機、藕が偶、絲が思、布が夫の音通双關語になる如く、「夫容」の意として數々使われ、『樂府詩集』では、「相和歌辭」、「清商曲辭」に集中し、特に後者の「吳聲歌曲」、「西曲歌」に頻出してゐる。「吳聲歌曲」中の「子夜歌」には、「乘月採芙蓉」、「芙蓉始結葉」、「芙蓉葩紅鮮」、「汎舟芙蓉湖」（何れも「夏歌」等と見える。又、「讀曲歌」にも、「花釵芙蓉髻」、「紅藍與芙蓉」、「千葉紅芙蓉」とある。これらの殆んどは戀愛詩である。「西曲歌」にも、「芙蓉作船絲」、「芙蓉爲帶石榴裙」（何れも梁武帝「烏棲曲」）、「芙蓉繞牀生」（「楊叛兒」）、「芙蓉始懷蓮」（「月節折楊柳歌」）、「願襲芙蓉裳」（梁武帝「江南弄」）等がある。こういう戀愛假託説と『楚辭』系の自らの優秀さを高位顯官に訴える政治的寓意説とが生じる所以である。

芙蓉には水邊に咲く蓮の類と、木芙蓉（木蓮）とがある。『藝文類聚』は『爾雅』、『廣雅』を引いて次の如く言う。

爾雅曰、荷芙蓉、其莖茄、其葉葭、其本密、其實蓮、其根藕、其中的、的中慧、的蓮實。廣雅曰、菡萏、芙蓉也。と。表現自體とすれば、芙蓉は芙蓉でも、菡萏でも、荷でも蓮でもよかつた筈である。ところが、詩中の例としては蓮

を最多數として、「荷花抱綠房」（陳後宮）・「玉池荷葉正田田」（「碧城」三首・其の二）・「餘香猶入敗荷風」（「過伊僕射舊宅」）・「衰荷一面風」（「登霍山驛樓」）・「惟有綠荷紅箇莖」（贈荷花）等の熟語として見える他、「芙蓉」、「菡萏」の例は以下の如く、「楚嬌捧笑開芙蓉」（「燒香曲」）・「霧夕詠芙蓉」（「漫成」三首・其の三）・「惟有綠荷紅箇莖」（前出）・「華蓮開箇莖」（靈仙閣晚眺寄鄆州韋評事）・「菡萏薦紅衣」（「如有」）等と詠まれるのみである。だが、無題詩中には全くその例はない。

芙蓉については集中十二カ所の用例を見る。

十歲去踏青 芙蓉作裙衩（無題「八歲偷照鏡」）
裙衩芙蓉小 釵茸翡翠輕（無題「照梁初有情」）

口詠元雲歌 手把金芙蓉（李肱所遺畫松詩兩紙得四十韻）

南浦老魚腥古涎 眞珠密字芙蓉篇（「河陽詩」）

楊柳路盡處 芙蓉湖上頭（代贈）

後溪暗起鯉魚風 船旗閃斷芙蓉幹（「河內曲」・其の二・湖中曲）

蟬照半籠金翡翠 麝熏微度繡芙蓉（無題「來是空言去絕踪」）

（來）

颯颯東風細雨來 芙蓉塘外有輕雷（無題「颯颯東風細雨來」）

（來）

芙蓉王儉府 楊柳亞夫營（「五言述德抒情詩四十韻獻上杜七兄僕射相公」）

水仙欲上鯉魚去 一夜芙蓉紅淚多（「板橋曉別」）

數急芙蓉帶 頻抽翡翠簪（「獨居有懷」）

鏡檻芙蓉入 香臺翡翠過（「鏡檻」）

全體の傾向として次のことが言える。十二首中、古詩が五首

（「八歲偷照鏡」・「李肱所遺——」・「河陽詩」・「代贈」・「湖中曲」）を占めていること。無題の四分の一に相當する四首

（但し、詩中の二字を取って題としたものを含むとすれば五首）に芙蓉の語が見えること。樂府題辭が用いられているものは一首のみであること。ちなみに李賀・溫庭筠の例を擧げる。

李賀；「芙蓉注露香蘭笑」（「李馮筮篋引」）・「曲沼芙蓉波」

（「貴公子夜蘭曲」）・「竹黃池冷芙蓉死」（「河南府試十二月樂詞」）

九月；「南浦芙蓉影」（「黃頭郎」）・「休睡芙蓉屏」（「申胡子鵞鵲歌」）・「隱語突芙蓉」（「惱公」）・「十騎簇芙蓉」（「追賦畫江潭苑」）

四首・其の四）・「芙蓉凝紅得秋色」（「梁臺古意」）・「鯉魚風起芙蓉死」（「江樓曲」）・「驚起芙蓉睡新足」（「美人梳頭歌」）・「芙蓉別江水」（「月漉漉篇」）・「芙蓉葉落秋鸞離」（「聽穎師琴歌」）

溫庭筠；「芙蓉持作梁」（「江南曲」）・「白上芙蓉楸」（同上）

「芙蓉澹蕩秋水波」（「七夕歌」）・「芙蓉力弱應難定」（「舞衣曲」）

「鏡裏芙蓉照水鮮」（「蘭塘詞」）・「門外芙蓉死」（「邊笳曲」）・「天井倒芙蓉」（「長安寺」）・「謝詩生芙蓉」（「祕書劉尚書輓歌詞」）二首・其の二）・「連天展盡金芙蓉」（「春江花月詞」）・「鳳凰窗桂繡芙蓉」（「楊柳枝」）八首・其の七）・「屏掩芙蓉帳」（「過華清宮二十二韻」）・「油額芙蓉帳」（「感舊陳情五十韻獻淮南李僕射」）

各々十二カ所に引かれる。尙、荷は李賀に四例、溫庭筠に十一例を數える。芙蓉の例は兩者共になく、菡萏は後者に一例あるのみで、蓮が多用されること、李商隱と同じである。用例的には李商隱ほどの擴散が見られないと言えるであろう。

ただ、ここで注目されるのは、李賀・溫庭筠共に樂府題辭をそのまま詩題に持つ詩に、芙蓉の語が多く用いられていることである。前者に四例（「李馮筮篋引」・「河南府試十二月樂詞」・「黃頭郎」・「月漉漉篇」）、後者に五首六例（「江南曲」二例、「舞衣曲」・「蘭塘詞」・「春江花月詞」・「楊柳枝」）を數える。兩者の他の詩も近體詩より寧ろ樂府系の題辭であることも注目値する。李賀の場合三首（「惱公」・「追賦——」・「梁臺古意」）を除き、他は歌・篇という歌行體が用いられているのである。同様に溫庭筠も三首（「長安寺」・「過華清宮二十二韻」・「感舊陳情——」）に過ぎない。李商隱の樂府題辭的詩題が「河内曲」一例しかないのと比較して極立った對

照をなしている。李賀、温庭筠は芙蓉の語を用いる時、樂府系の體裁を取っていることになるわけで、古體詩の意識の下で作詩していたと言えよう。先に述べた如く、李商隱の場合、芙蓉の語の見える詩の約半數が古體詩である。ただ、無題詩に限ってみるならば、芙蓉の語の用いられる四首のうち一首が古體詩で、あとは五言、七言の律詩である。ここに無題詩の特殊性が窺われよう。すなわち、樂府詩ではないが、樂府詩的なものを無題詩で代替させようとしたのではないかとする推測も成り立つのである。

各無題詩に則して、それと關連すると思われる樂府詩を目につくままに挙げておけば、左の通りである。

「八歲偷照鏡」；「芙蓉作船絲」(梁簡文帝「烏棲曲」)・「芙蓉爲帶石榴裙」(梁元帝「烏棲曲」)・「毘場生青草」(江陵樂)・「相將蹋百草」(同上)

「照梁初有情」；「杏梁日始照」(日出東南隅行)・「朝日照屋梁」(碧玉歌)・「芙蓉始出水」(阮研「權歌行」)

「聞道閨門萼綠華」；「照我秦氏樓」(陌上桑)

「紫府仙人號寶燈」；「雍臺十二樓」(吳均「雍臺」)

「相見時難別亦難」；「春蠶易感化」(子夜歌)・「春蠶不應老」(作蠶絲)・「流涕向春蠶」(吳均「採桑」)

李商隱詩に見える芙蓉について(鈴木)

「來是空言去絕踪」；「水晶簾箔繡芙蓉」(崔顥「盧姬篇」)
「颯颯東風細雨來」；「四周芙蓉池」(子夜四時歌)・「雷聲聽隱隱」(孔翁歸「班婕妤」)

「含情春晝晚」；「含情泣團扇」(徐賢妃「長門怨」)・「月沒參橫、北斗闌干」(古樂府)・「北斗闌干星漢照」(滿歌行)

「何處哀箏隨急管」；「催弦急管爲居舞」(鮑照「白紵歌」)・「老女不嫁只生口」(捉搦曲)・「阿婆不嫁女」(折楊柳枝歌)

「鳳尾香羅薄幾重」；「賤妾裁絢扇」(張烜「班婕妤」)・「芙蓉爲帶石榴裙」(前出)・「垂楊復垂楊」(梁元帝「折楊柳」)

「重幃深下莫愁堂」(前出)・「近橋梁小姑」(所居獨處無郎「青溪小姑曲」)

「白道勞迴入暮霞」；「青牛丹轂七香車」(梁元帝「烏棲曲」)
「近知名阿侯」；「十六生兒名阿侯」(古樂府)

その他、「幽人不倦賞」でも樂府「董嬌饒」との類似を思わせる「風蝶強嬌饒」の表現が出るし、「萬里風波一葉舟」では樂府ではないが、張飛、王濬の說話が出たり、すぐれて三國六朝の素材を利用してはいる。何良俊『四友齋叢說』に齊梁體自盛唐一變之後、不復有爲之者。至温李出、始復追之。

とあるのも、ここらの機微を言い得ていよう。

△4▽

ところで、芙蓉の語の用いられる各詩の製作時期は次の如く推定される(張采田による⁽¹⁷⁾)。

太和元年(八二七)；十六歲。姉徐氏卒す。無題「八歲偷照鏡」。

開成元年(八三三)；二十五歲。令狐楚義山を聘く。「李肱所遺畫松詩書兩紙得四十韻」。

開成三年(八三八)；二十七歲。王茂元女を娶る。無題「照梁初有情」。

開成五年(八四〇)；二十九歲。義山家を移る。招かれて江潭に遊ぶ。「河陽詩」。

會昌元年(八四二)；三十歲。義山郷より京に還る。「代贈」。「湖中曲」。

大中五年(八五二)；四十歲。太學博士に補せらる。妻王氏卒す。無題「來是空言去絕踪」。無題「颯颯東風細雨來」。

大中六年(八五三)；四十一歲。四川よりかえり、又梓州に歸る。「五言述德抒情詩四十韻戲上杜七兄僕射」。

不明；「板橋曉別」、「獨居有懷」、「鏡檻」。製作時期の推定可能な九首の中で、四首は「八歲偷照鏡」

が姉徐氏の死の年、「照梁初有情」が王氏を娶った年、「來是空言去絕踪」及び「颯颯東風細雨來」が妻王氏を病に失った年という如くに、特に身近かな女性との關わりを持っている。

「八歲偷照鏡」は詩の構造からは古詩「爲焦仲卿妻作」の筆法を借りて、少女が一人前の女性になってゆく過程を示す。「八歲偷照鏡 長眉已能畫」とする初聯は、八歲という年端もゆかぬ子供が母親か姉の眞似をして黛で眉を描く所作を詠む。「十歲去踏青 芙蓉作裙衩」も子供心を描く。前出『楚辭』系の政治的寓意説を取れば、十歳の頃から人にすぐれていたと解されるが、より單純には、綺麗な服を着ていたいとする幼な心の表現であろう。「十二學彈箏 銀甲不曾卸」は少女から乙女へと變る節目を、習い事を始めたことで示す。「銀甲」、「彈箏」とある故に、特に藝を習う必然性のある女性と取る説もある⁽¹⁸⁾。だが、むしろ、熱中の餘り箏の爪をはめたままにしている様は、大人にはまだ成り切れぬ少女を描いて鋭い。「十四藏六親 懸知猶未嫁」、この聯に至って始めて女らしい仕種、態度が見られるようになる。「十五泣春風 背面鞦韆下」、ここで遂に子供のイメージは拂拭されるのである。春の愁いも十分に存知できる年頃になったことが暗示

される。作者に即して考えれば、「應舉時」の説も生じるわけ、少年から青年へと變る時期こそ科擧受験の年頃であろう。その意味で、張采田は少年の天真爛漫さが次第に薄れてゆき、世の汚れに染んで、人を愛し初める、その間を詠んだものと主張する。私も基本的にはこの少年渾認説に同意するものである。

ところで、受験の心境の詠とまで斟酌する必要はないとする張采田の指摘を敷衍させるならば、この詩を李商隱が詠まねばならなかった心理的蓋然性をどこに求めたらよからうか。馮浩の如く、自らの他に優れた點を詠んだとする説、『楚辭』を引く態度から考えて當らないと言えなくもない。

だが、この年、彼にとって一つの大事件が起きるのである。それは姉徐氏の死であった。後年、「祭徐氏姊文」、「祭斐氏姊文」という二篇の祭文を書く。徐氏、斐氏に嫁いだ二人の姉の死を祭る文である。寒門の長子であった意識のなせるわざではあろうが、姉思いの程が窺われようというものである。まして、少年時代における姉の存在は大きなものであったろう。これに對して、蘇雪林は飛鸞・輕鳳を詠んだものと言う。⁽¹⁹⁾

二人が宮嬪であったとすれば、科擧にも受かつていない青年が宮中に出入りをする事など、困難ではないか。詩が空想

李商隱詩に見える芙蓉について（鈴木）

の所産であるとしても、身近かに目にすることのできる女性であったればこそ、あのような精細な描寫が可能になったと考える方が自然である。

後に、『樊南甲集』、『樊南乙集』の編定を自ら行なったわけ、各々の時期に改稿した可能性もあるが、太和元年十六歳頃に、芙蓉の語を身近かな女性に寓意する言語感覚が育つていったものと推察される。

「照梁初有情」は次の如く詠まれる。

照梁初有情 出水舊知名 裙衩芙蓉小

釵茸翡翠輕 錦長書鄭重 眉細恨分明

莫近彈碁局 中心最不平

この詩は「八歲偷照鏡」より約十年後の作品である。何遜の

「新婚詩」の

霧夕蓮出水 霞朝日照梁

の句及び曹植の

其始來也、耀乎如白日、初出照屋梁

とする「神女賦」、

灼若芙蓉出綠波

とする「洛神賦」の表現を受けたものであろう。何遜の「蓮」、

「出水」、照梁、曹植の「照屋梁」、「芙蓉」が詩の前半に見

事に取り入れられているからである。この意味では、芙蓉が女性の形容であることは言うに及ばず、「漫成」三首、其三、

霧夕詠芙蓉 何郎得意初

とも同じ時期の作品であって、芙蓉は新婚間もない新婦の姿を髣髴させるものである。すなわち、ここでの芙蓉は自分の妻を寓意したものと見ることができよう。更に、翡翠の語に、宋玉の「諷賦」の

主人之女以翡翠之釵、挂臣冠纓

を當てる注もある。王茂元の女を娶った李商隱にとってより應しいものではある。

この間、芙蓉は「李肱所遺畫松詩兩紙得四十韻」で、

口詠元雲歌 手把金芙蓉

と詠まれるだけである。だが、この芙蓉は「金芙蓉」として三字の熟語となっている。樂府「子夜歌」では、

玉藕金芙蓉 無病我蓮子

とあり、女性が冷たくなった男性へのつらみを詠んでいる。

又、溫庭筠の「春江花月夜詞」では

百幅錦帆風力滿 連天展盡金芙蓉

と、陳後主及び隋煬帝の後宮の華やかさを形容する語として

表われる。しかしながら、ここでの金芙蓉は李白の「廬山謠」中の

遙見仙人綏雲裏 手把芙蓉朝玉京

の表現にある、仙人の持ち物ではないか。この意味では、詩そのものを畫讚の一種と見るのが妥當であろう。金芙蓉は女性のイメージというより、畫中の道士或は女道士の持っている道觀内の具である。

「來是空言去絕蹤」及び「颯颯東風細雨來」が共に大中五年（八五二）の作であることに觸れたい。兩詩は次の如く詠まれる。

來是空言去絕蹤 月斜樓上五更鐘 夢爲遠別啼難喚 書

被催成墨未濃 蠟照半籠金翡翠 麝熏微度繡芙蓉 劉郎

已恨蓬山遠 更隔蓬山一萬重

颯颯東風細雨來 芙蓉塘外有輕雷 金蟾齧鍊燒香入 玉

虎牽絲汲井廻 賈氏窮簾韓掾少 宓妃留枕魏王才 春心

莫共花爭發 一寸相思一寸灰

張采田は妻王氏の死を、この年の秋初として、「赴職梓潼留別畏之員外同年」中の句、

留別畏之員外同年」中の句、

桂花香處同高第 柿葉翻時獨悼亡

を例に取り、柿の葉の散る頃に商隱は妻を失ったと判断する

のである。⁽²⁰⁾ 畏之とは韓偓の父瞻のことであるが、彼らは共に王茂元の姉妹を妻としている。「房中曲」でも

枕是龍宮石 割得秋波色

とあり、その悼亡が秋であったと知られる。この点から見れば、「來是空言去絕蹤」も「月斜」の語から、秋の作と考えられなくもない。しかし、張采田は「東風」が春風、「春心」が文字通り春であることから、同年の春の作と断じているのである。しかし、その悼亡の詩と考えられるものの構造を眺めてみると、春に關わる語が出たとして、それをすぐ春の作と捉える必要のないことが分かる。「房中曲」では、「憶得前年春」、「錦瑟」では、「望帝春深託杜鵑」、「暮秋獨遊曲江」では、「荷葉生時春恨生」、前出「趣職梓潼留別畏之員外同年」で「桂花香處同高第」とあったとおりである。「東風」、「春心」（「颯颯東風細雨來」）、「春晚晚」（「含情春晚晚」）、「櫻花」、「三月」、「清明」（「何處哀箏隨急管」）の諸語があっても、詠まれた時節を春に限定する必要はなからう。この見方を採れば、同じく大中五年の作、無題詩「相見時難別亦難」も悼亡と考えることができる。私は「來是空言去絕蹤」、「颯颯東風細雨來」二詩中に見える芙蓉の語に妻王氏のイメージを重ね合わせる説に普遍性を見るものである。

河陽詩の讀みについては、楊嗣復寓意説、湘中での寓意説、⁽²¹⁾ 妻王氏の悼亡説、⁽²³⁾ 宮嬪との戀愛説等がある。ここに端無くも芙蓉の語の四種の見方が表われたことにもなる。

南浦老魚腥古涎 眞珠密字芙蓉篇

中の「南浦」が送別の地であって、「老魚」が古樂府、

客従遠方來 遺我雙鯉魚

を踏まえたとするならば、別離とそこへの便り、或はこちらからの便りを寓意することになり、「眞珠密字芙蓉篇」は便りの形容である。更に、「黄河」の二字に注目するならば、これは王茂元の治所での新婚を表わすことになる。よって、ここにおける芙蓉は、やはり妻王氏を寓意である。妻から女手の便りが來たと解されよう。

「代贈」、「湖中曲」の二首は同じ時期に作られる（六八ページ参照）。内容的には、「代贈」で石崇と王愷の奢侈ぶりを描き、「湖中曲」では

閨門日下吳歌遠 跛路緣菱香滿滿

と詠む。何れも「河陽詩」と同じく湘中のことを詠んでいる。又、各々の後半の部分で

鴛鴦可羨頭俱白 飛來飛去煙雨秋

及び、

莫因風雨罷團扇 此曲斷腸惟北聲

とあり、「鴛鴦」、「團扇」から女性が暗示される。紀昀、朱彝尊たちが艶詞と採り、馮浩が湘中での情事の寓意と解するの(25)も恐らくはこの点によるであろう。だが、鴛鴦は仲の良い男女であるし、北聲は妻を残してきた地とを芙蓉で暗示しつつ、猶更に鴛鴦により夫婦、北聲により妻の居る地を寓意している(26)と採ることができよう。

「五言述德抒情詩四十韻獻上杜七兄僕射相公」に見える、芙蓉王儉府 楊柳亞夫營

は、南齊の王儉が孔悼を太祖に推薦した故事、漢の周亞夫が文帝に直言した故事に因んでいる。詩中に「悼傷潘岳重」の句があることから、妻を亡くした自身を語っていることが分かる(妻の死の翌年の作)。だが、ここでは、直截に妻の悼亡を言うのではなく、晩年の李商隱が傳を求めて杜悰に就職を依頼したものと考えてよい。自らを矜る『楚辭』流の芙蓉の使用である。

「板橋曉別」、「獨居有懷」、「鏡檻」中の後二者に見える芙蓉は妻王氏を寓意している。製作年時は何れも不明であるが、詩題が自ずからその経緯を語っている。劉維崇は芙蓉、翡翠を王茂元の二人の娘と採るが、必ずしもそこまで言わないにしろ、

數急芙蓉帶 頻抽翡翠簪

は若き妻の姿をオーバーラップさせる。「怨魂」の語はその死を表わす。末句

只聞涼葉院 露井近寒砧

はその死の季節を暗示すると共に、秋冷の中で亡妻を追憶する詩人の姿である。詩題の「獨居」の王は元來配偶者のいないことを言うものであり、妻を失った詩人が思いを致しているとの見方も可能ではないか。

「鏡檻」は水鏡の意でもなく、鏡殿中の欄檻でもない。劉維崇の言う如く、納涼のための「涼棚」と採るのがよい(27)。鏡殿中の欄檻と採るから宮女とも宮嬪との情事とも繋るのであって、官位にすれば、最高が太學博士の六位に過ぎない李商隱が、彼らと自由に戀愛ができたであろうか。その想像力の豊富さを示唆するものであったとしても、機會があったとすれば、王茂元の家における納涼會での若かりし妻との出會であらう。

「板橋曉別」は文字通り留別の作で、芙蓉及び紅涙の語から女性との別れのイメージを持つ。妻王氏の悼亡と採るには根拠が薄いし、「水仙」から道教臭を嗅ぎ、女道士を芙蓉に象徴させるのにも無理がある。板橋での宮嬪との情事説も採

れない。寄托の有無はともかくとして、板橋で一夜を明かした男女の後朝の別れを主題として、女性を芙蓉で象徴しているのは確かであろう。

△5V

以上眺めてきた如く、李商隱の樂府詩は李賀、溫庭筠に比較すれば、それほど多くない。しかしながら、詩中に樂府題辭及び樂府詩の一節を引いたのではないかと思われるものまでを含めれば、かなりの数の詩が樂府詩との關わりを持っている。むしろ敢えて樂府詩と稱さぬ所に李商隱流の意圖を見る。その内的な部分は詩文中から窺うべくもないが、六朝詩、樂府詩と赤裸裸に語るのを潔しとしない側面が多少なりとも存在したものとされる。ただ、それは△2Vでも述べたごとく六朝の傳統そのものを全體的に拒否するものではない。そのことは彼がイメージや發想の次元では六朝的な傳統を積極的に取り入れていったことから理解できよう。

本稿では、六朝詩に多く見られる芙蓉の語に注目して、それが無題詩を代表する一つの顯著な象徴であることに触れ、内容的には、詩意が明らかに植物の芙蓉そのものを指す場合を除いて、それが特に自分の身近かな女性、すなわち、姉及

李商隱詩に見える芙蓉について（鈴木）

び妻王氏を寓意する際に用いられていることを俯瞰してみた。

尙、李商隱ほど典故を多用した詩人は珍しく、「頼祭」の名はそこから出るわけだが、意圖する所は近體詩の中に如何にイメージの許容量を増やしてゆくかの試みでもあった、と私は考える。ここで論じた芙蓉の語ですら、四種の解釋を見た。各種の理解が行なわれていること自體、その詩の難解さを示していると同時に、讀者の自由な想像を許容するものではある。無題詩の辿った方向はまさにそうしたイメージの集積であり、彼の努力の結果でもあったと見做すことができよう。

△一九七九・十・完V

〔注〕

(1) 注本に關しても、宋の劉克本、張文亮本、とも傳わらない〔玉谿生詩意〕序等〕。明末の釋道源の注は沈厚瑛「輯評本」中に敬見されるが、諸家の言う如く不備なものと言える。詩集自體も高橋和巳の指摘のとおり、「完全にもとの姿を留めるものとすべき保證はない」との説に與す。

(2) 石印本『李義山詩集箋注』程夢星刪補（中華民國六十一年五月刊、廣文書局版）及び『李義山詩集』沈厚瑛輯評（同治

庚午)に據る。

(3) 『叢書集成』所收『西崑發微』(中國民國二十六年十二月刊、商務印書館)に據る。

(4) 縮印本『玉溪生詩詳註』(中華民國六十六年八月刊、華正書局)及び『四部備要』本『玉谿生詩箋注』一、二に據る。

(5) 『玉溪生詩意』(中華民國六十三年六月刊、正大印書館)

(6) 何焯『何義門讀書記』(沈厚燠『輯評』本。以下、何焯の言はこれに據る。)に

小馮云、只學得焦仲卿妻一段。

とある。

(7) 『四部備要』本『樂府詩集』及び、『樂府詩集の研究』(中津濱涉・汲古書院)所收北京圖書館藏宋刊本を并見(以下、『樂府詩集』の引用、詩句の引用はこれに據る)。

(8) 張采田『玉谿生詩年譜會箋』(一九六三年八月、上海中華書局。以下、張采田を引く時はすべてこれに據る)に

寫少年洪泐依人之態、與上崔華州書『五年讀經書、七年弄筆硯』、及甲集鈔寓意相合、亦作於此年。馮氏謂初應舉時、非也。

とある。

(9) 馮浩『玉谿生詩詳註』に

上崔華州書、五年讀經書、七年弄筆硯。甲集序、十六者才論聖論、以古文出諸公間。此章寓意相類初應舉時作也。酌編於此。

とある。

(10) 注(8)に同じ。

(11) 沈厚燠『輯評』本は引かず。及び程夢星『刪補』本にも見えず。屈復『詩意』も同じ。

(12) 『西崑發微』卷上所收。

(13) 『藝文類聚』(一九七三年二月刊、中華書局香港分局本)に據る。

(14) 『李長吉文集』影宋本(中華民國五十六年五月刊、臺灣學生書局)及び、葉葱奇編定『李賀詩集』(一九五九、人民文學出版社)、王琦等注『李賀詩歌集注』(一九七七、上海人民出版社)等を并見。

(15) 曾益謙原註『溫飛卿詩集』(中華民國六十年八月刊、臺灣學生書局)及び『四部備要』本『溫飛卿集箋注』に據る。

(16) 『李義山詩箋注』、『刪補』本、『玉谿生詩箋注』に據る。

(17) 注(8)に同じ。

(18) 蘇雪林『李義山戀愛事跡考』(現、『玉溪詩迷』、民國五十八年五月、臺灣商務印書館)一〇四頁に

此詩亦爲鸞鳳二人作、『十二學彈箏、銀甲不曾卸』、足知二人出身樂籍。末兩句似言敬宗崩時、二人只有十五六歲、此外則擬意『伴盡臥筵篔簹』、代應『獨映鈿篔簹』、都可以證明所愛宮嬪善於絃索。

とある。

(19) 注(18)に同じ。

(20) 注(8)に同じ。

(21) 張采田『王谿生年譜會箋』に朱鶴齡、

箋曰：燕臺詩爲嗣復發、此則更兼李執方言之。以河陽命題、執方節度河陽、而義山本河陽人也。首二句點地。……を引く。

(22) 馮浩『玉谿生詩詳註』に

諸詩中用字多似嶺南者、合之代越公房妓之作、頗疑楊嗣復自潭貶潮時之情事。但無可妄測也。

(23) 張采田『玉谿生年譜會箋』に、

朱氏等以王茂元曾帥河陽、斷爲悼亡、……

とある。この朱氏は朱彝尊のことで、『李義山詩箋注』「輯評」本で次のように引かれる。

補註、謂悼其妻王氏之詩也。茂元常爲河陽節度使、故以名篇。……按義山自茂元女亡後、終身不娶。觀其與河東公辭、張讓仙啓、可知其篤於伉儷。讀此詩眞不減安仁悼亡之作。

とある。

(24) 蘇雪林『李義山戀愛事跡考』四七ページに、

河陽詩『黃河搖落天上來、……』也是詠的王德妃之事。德妃或是河南人、故詩河陽、又屢標黃河字樣以醒人耳目。とある。

(25) 『李義山詩箋注』「輯評」本で、紀昀、朱彝尊の言を各々、

此二首似是艷詞或寫河內所遇也。

李商隱詩に見える芙蓉について(鈴木)

及び、

轉似樓上。

と載せる。

(26) 『玉谿生詩詳註』に

首四句、實賦吳中水遊。用吳中事、似與諸篇不同。豈其本吳人耶。要難妄測。

とある。

(27) 『李商隱評傳』(中華民國六十七年三月刊、黎明文化事業股份有限公司)五八ページに、

此外、還有一首詩。也是寫與王氏姊妹歡宴的情形：

「鏡檻芙蓉入……」——鏡檻。鏡檻就是錦檻、也稱錦棚。在唐朝時候、長安富豪之家、每逢伏、在園林中、植柱結錦爲涼棚、設酒宴召名妹或親友喜樂、稱爲「避暑會」(見開元遺事)、義山可能參加了王氏的避暑會、感到十分欣幸、寫詩記勝。

とある。